

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520621

研究課題名(和文)日本語教育プログラムにおけるエンパワメント評価の実践

研究課題名(英文)Empowerment Evaluation Practice in a Japanese Language Program

研究代表者

鎌田 倫子 (KAMADA, Tomoko)

富山大学・医学薬学研究部(医学)・教授

研究者番号：10334731

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：平成23年度より研究代表者らが所属する富山大学杉谷キャンパス日本語プログラムにおいて、エンパワメント評価(以下EE)を実践してきた。この実践は、国内では例がなく言語教育プログラムでは国際的にも珍しい。平成23年度には、まず担当教員内にEE原理の理解を深め、民主的な話し合いの土壌を作りながらプログラム・ミッションを策定した。その上で3年間の実践ゴールを、ミッションに適合した「学習達成目標設定」と「達成を測る指標作り」とした。

その後プログラム内容をミッションに適合させ改善していく過程で教員側に常勤・非常勤を越えた民主的参画と、主体的関わり・組織学習の強化など、EEの原理の一部の達成が観察された。

研究成果の概要(英文)：Toyama University Sugitani Campus Japanese Language Program has been implementing Empowerment Evaluation (EE) since 2011. EE is still an emerging approach in Japan and is rarely practiced in language programs. During 2011, efforts went into building language instructors' understanding of the EE principles, creating the context and space for democratic curricular discussion, and developing a program mission statement. Based on the initial phase, evaluation project aimed at generating program-level student learning outcomes statement and gathering indicators to assess student achievement of the outcomes. Through a democratic and participatory process of aligning program activities and curriculum to the outcomes and mission statement, all instructors showed proactive engagement and program and evaluation ownership. As indicated in EE principles, evaluation activities brought tangible program change and organizational transformation to become a learning organization.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：エンパワメント評価 理系小規模日本語プログラム 教員・学生の当事者意識 教員・学生の民主的参画 対話クラス アメリカ評価学会 ミッションから学習達成目標の連続性 3ステップ・アプローチ

1. 研究開始当初の背景

筆者らは平成20年度-22年度の科学研究として学校型、地域型¹の双方にまたがり北陸地域の日本語プログラムの現状調査を行った結果、どちらのタイプでも教育資源の少ない小規模プログラムでありながら、学習者の母語やレベルなどの多様性の大きいプログラムが困難なプログラムであることを指摘した。そして、筆者らの関わる大学の理系キャンパスにおける小規模な日本語プログラムは地域型と共通する環境的な困難さも抱える、学校型の中では周辺的な困難なプログラムであることを自覚した。そうしたプログラムを如何にして改善していくかという視点で様々な評価理論を見た時に、「エンパワメント評価」という画期的な評価法がアメリカで開発されているが、日本にはほとんど紹介もされていないことに気づいた。小規模な弱小プログラムにはエンパワメントこそ必要であると考え、この評価法について研究し、実践により評価法としての有効性を検証し、日本に紹介したいと考え、この科研を申請した。幸い科研に採択され、アメリカ評価学会に所属する外部評価者の参加も得て、筆者らの日本語プログラムにおいて3年間の科研評価研究を行った。

2. 研究の目的

研究究目的を以下のように設定した。

1) エンパワメント評価の評価方法としての研究

①研究代表者の主宰する大学の小規模な日本語プログラムで、「エンパワメント評価」を実践し、日本初の実践例となる。

②エンパワメント評価の日本初の実践例として、実践に当たっての手順の確認、問題点の発見、並びに有効性の検証を行う。(エンパワメント評価の有効性の検証)

¹ 本稿では、「学校型」を学校機関主催の主に留学生対象の教育の場とし、「地域型」を自治体や任意団体主催の主に定住型外国人対象の教育または支援の場とする。

2) エンパワメント評価におけるエンパワメントの達成

①理系キャンパスでは研究が忙しく日本語学習に十分な時間を割けない上に、日本語に曝される機会も少ない。学習環境上の困難さをどのように克服するか。(学習者のエンパワメント)

②日本語学習に対する周囲の無理解、外国人に対する言語保障等の社会的エンパワメントの必要もある現場である。社会的なエンパワメントを含む真の「エンパワメント評価」をどのように実践するか。(プログラム当事者のエンパワメント)

3) エンパワメント評価活動の目的

①小規模日本語プログラムである上、多言語集団からなる第二言語教育の現場であり、学習者の属性も多様で、プログラムの時間数も少ないという困難なプログラムをどのように改善するか。(プログラム改善の課題)

②エンパワメント評価理論に則った、当該プログラムのミッションの策定、それに沿ったコース目標、学習達成目標の整備、クラス内の活動や期末試験など、目標の達成を見るための指標の整備とした。(プログラム改善のための具体的課題)

この科学研究の目的は、「エンパワメント評価」の理論を理解し、理論に則って外部評価者の指導の下にエンパワメント評価を実践し、1) 実践方法を体得し、日本に紹介すること、エンパワメント評価により、2) プログラムの当事者にエンパワメントが起こるか、3) プログラムが改善されるかを検証し、エンパワメント評価の有効性を検証することであった。

3. 研究の方法

3年間の科研期間で、平成23年度は準備期間、平成24年度は当該プログラムにおける

エンパワメント評価の実践、平成 25 年度は実践結果の検討と位置づけた。実践報告のためにはすべてのエンパワメント評価会議に書記を依頼して、レコーダーの記録と会議録を整備した。エンパワメントや改善などの変化を見るためには、事前のベースライン調査と事後の調査結果を比較すること、データは主に質的データをとり、質的分析方法で処理することとした。

1) 平成 23 年度 事前準備 4 回のエンパワメント評価会議の実施

①第 1 回 (12 月) : PAC 分析講習会により教員の事前意識のデータを収集した。評価研究への教員の参加を勧めた結果全教員の参加を得て、教員のベースライン調査として、インターネットアンケートと PAC 分析により、教員のプログラムや評価についての事前意識のデータを収集した。

②第 2 回、第 3 回 (1 月) : 外部評価者と全教員により、エンパワメント評価理論に則り、3 ステップ・アプローチを実施した。

外部評価者によるワークショップとして、エンパワメント評価 (フェタマンら 2005) の 3 ステップ・アプローチの (i) 使命の構築、(ii) 現状把握、(iii) 将来計画の策定 (途中まで) を直接的当事者である全教員で決定した。

③第 4 回 (3 月) : 全教員による評価会議で、平成 24 年度のコースデザイン改革、コースの達成目標原案を作成した。

2) 平成 24 年度

平成 24 年度、前・後期に、研究代表者らの所属する大学理系キャンパスの小規模日本語コースにおいて、コース改革を含むエンパワメント評価を 2 学期間実践した。

①地域日本語教育の知見を生かした「対話活動クラス」を 3 クラス、日本人支援者を入れて展開し、学習者の発話力の養成と現実の生活に働きかける力の育成 (学習者のエンパワ

メント) を目指した。

②学習者にベースライン調査として、日本語教育へのニーズ調査を実施し、学期の終了後、同じ質問票で学習者の意識の変化を見た。

③エンパワメント評価ワークショップでは、フォーカスグループインタビュー (FGI) の実施法について研修を受け、後期終了後、学習者から、より率直なニーズとコース評価を受けるために、FGI を学習者に 4 回、留学生のチューターに 1 回実施して、エンパワメント評価によるコース改革についての評価データを収集した。

3) 平成 25 年度

①平成 25 年度には、平成 24 年度末に収集した FGI による評価データを基に、学習者と日本人チューターのプログラム改善への意欲、ニーズの自覚、自身の問題を解決しようとする社会的エンパワメントの状況を質的分析法により分析した。

②3 回のエンパワメント評価会議により、学習者やチューターの FGI の結果を分析した結果から、理系小規模日本語プログラムという特性を生かしたミッション・ゴール・学習達成目標を連続性・実効性のあるものに改訂した。

③更に、学習達成目標に沿って、期末テストやオーラルテストも検討し、指標もある程度整備した。これは今後も続けて完成させる。

4. 研究成果

1) 平成 23 年度

①準備段階の平成 23 年度には、プログラムの直接の当事者である教員にエンパワメント評価への参加を働きかけ、十分な納得の上全員の参加を得て、エンパワメント評価の 10 の原理のうち、民主的参加と全員参画を達成した。その説得の過程で、事前、事後のインターネットアンケート調査や会議録の分析から、教員の当事者意識の高まりとプログ

ラムへの主体的な関与の増加が認められた。
②また、すべての教員会議において、エンパワメント評価会議と同様に、外部評価者により導入された「ディスカッション・ルール」を守り、全ての構成員の発言を保障することで、民主的参加や全員参画の原理を実現する意思決定システムに改善されてきた。教員のインターネットアンケートでのコメントから、特に若い教員に参画意識が強くなったことが観察された。

2) 平成24年度

① 対話活動クラスにおいて、地域日本語プログラムのコーディネータや日本人学生のサポーターを入れることで、エンパワメントの対象をプログラムの周辺にいる関係者にまで広げた。その結果、学習者の視野も広くなり、自分自身の問題を日本人サポーターとの話し合いにより解決する社会的コミュニケーション能力や相互コミュニケーション能力が養われて来た (FGI) でも、学習者が自分たちの必要とする日本語ニーズや社会的コミュニケーション能力についての要望をしっかりと主張することができていた。対話活動クラスにより、学習者のエンパワメントが促進されていることが示唆された。

3) 平成25年度

①平成24年度の実践の分析から、プログラムの周辺にいる地域の日本人関係者や日本人学生のチューターなどの関係者との連携も意識して、プログラムに組織的に取り込むことを意識するようになった。

②エンパワメント評価自体の目的であったプログラムのミッション、ゴール、達成目標、指標の整備も進めた。

③対話活動クラスにおける実際の問題をトピックとする話し合い活動が、プログラムの改善と学習者のエンパワメントに有効であ

ることが認められたため、対話活動クラスの一層の充実を図った。その結果、学習環境の不備や、学習権の保障のされなさ等の当該プログラムの持っていた欠点を特性へと転化させるようなプログラム改善につながった。

即ち、エンパワメント評価は、直接的な当事者である教員、学習者を始め、周囲の日本人チューターや日本人サポーターなどプログラム関係者を巻き込み、実際の問題についての問題解決力をつけ、エンパワメントを起こすことによりプログラムを改善することができることが認められた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 5 件)

① 鎌田倫子・中河和子・後藤寛樹

「日本語教育プログラムとエンパワメント評価－困難な日本語プログラムを如何に支援できるのか－」

『日本語教育』査読有, 第155号, pp95-110
2013年8月 ISSN0 389-4037

② 中河和子・鎌田倫子・飯野令子

「エンパワメント評価実践においてエンパワメント文脈は、どのように高められたか－当事者意識に着目して－」

『富山大学杉谷キャンパス一般教育研究紀要』査読有, 第40号, pp89-106

2013年12月 ISSN 1882-045X

③ 鎌田倫子・中河和子・後藤寛樹

「理科系キャンパスの小規模日本語プログラムにおけるエンパワメント評価の実践」

『富山大学杉谷キャンパス一般教育研究紀要』査読有, 第40号, pp45-62

2012年12月

④ 高島智美・中河和子

「生活者のための漢字教材の開発－識字教育の枠組みでの学びをめざして－」

『富山大学留学生センター紀要』第11号,

査読無, pp. 11-21

2012年11月

⑤ 鎌田倫子・中河和子・後藤寛樹

「日本語教育プログラムにおけるエンパ
ワメント評価の適用は必然である」

『神田外語大学言語科学研究センター紀要』

第11号, 査読有, pp. 241-252

2012年3月

[学会発表] (計 5 件)

① Tomoko Kamada, Kazuko Nakagawa, Yukiko

Watanabe

Inducing Empowerment Evaluation: A Case

Study at a Japanese University,

27th Annual Conference of the American

Evaluation Association

(Washington DC, USA) Oct. 16, 2013

② 鎌田倫子・中河和子・後藤寛樹

「日本語教育プログラムにおけるエンパ

ワメント評価の実践報告」『日本語教育国

際研究大会名古屋 2012 予稿集』2012年8

月18日

③ Yukiko Watanabe, Tomoko Kamada, Kazuko

Nakagawa, Hiroki Goto

Enabling Conditions for Evaluation in a

Japanese Academic Context: A Case Study

of a Japanese as a Second Language

Program,

26th Annual Conference of the American

Evaluation Association

(Minneapolis, USA) Oct. 27, 2012

④ 古川嘉子・中河和子・札野寛子・小澤伊

久美

「現場日本語教師主体のプログラム評価

の提案」[パネルセッション]

『日本語教育国際研究大会名古屋 2012 予稿

集』pp. 52-53

2012年8月19日

⑤ 中河和子・品田潤子・池上摩希子・嶋田

和子

「社会型日本語教育」を担える人材とは—教

師教育の視点から— [パネルセッション]

平成『24年度日本語教育学会春季大会予稿

集』pp. 65-76 [(社)日本語教育学会]

東京 2012年5月26日

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者 鎌田 倫子

(KAMADA Tomoko)

富山大学・大学院医学薬学研究部 (医学)・
教授

研究者番号: 10334731

(2) 研究分担者 中河 和子

(NAKAGAWA Kazuko)

富山大学・大学院医学薬学研究部 (医学)・
非常勤講師

研究者番号: 00456401

(3) 研究分担者 後藤 寛樹

(GOTO Hiroki)

富山大学・留学生センター・准教授

研究者番号: 30324031